

「日本語における節の扱いの類型」

加藤重広

北海道大学

「節連結に関する通言語的研究」第1回研究会

アジア・アフリカ言語文化研究所

2010-05-22/23

【要旨】

日本語の節は、節外の要素を修飾しない主節、節外の要素を修飾する従属節に分けられ、後者は名詞（句）を修飾する形容詞節と、主に動詞句などの述部を修飾する副詞句に分けられる。名詞句は、形容詞節を伴った名詞（句）のことであり、この区分のなかには位置づけられない。しかし、形容詞節（関係節）が現れるところには名詞節が見られる。副詞節のなかには、動詞の活用形の1つである連用形や接続助詞のテを伴った形式が見られ、これは、テンスや文体やモダリティについては後続の主節の支配を受けるものの、意味的に見ると自立的な節であり、なかば並列的でなかば依存的である。ほかにも、並列できる接続助詞ガやシなどがあり、会話体においては、文を完結させずに接続助詞で延々と文を閉じないことが多い。また、形式上は複文に見えるものでも、名詞＋軽動詞の部分が文法化してモダリティを表す助動詞になることがあり、その場合は、意味機能上単文に相当するものになる。このプロセスは、主節の主要部が文法化によって助動詞になり、従属節部分が主節になる現象で、非節化と呼ぶべきものである。